

寂光院だより

令和元年 6 月 1 日

繼鹿尾観音 寂光院

〒484-0091 犬山市繼鹿尾山

TEL(0568)61-0035



◆音を観（み）る！

山主 松平實胤

繼鹿尾（つがお）の観音様

木曽川畔にそびえる繼鹿尾山寂光院は四季折々の風情は見事で、春は桜花、夏は緑、冬は雪、ことのほか秋の紅葉は「もみじでら」の愛称をいただくほどの山寺です。

しかし寂光院といえば、県下最古刹の千手観音霊場で、古来より「繼鹿尾（つがお）の観音さま」「厄除けの観音さま」と親しまれてまいりました。何と言っても思わず手を合わせてしまうその美しいお姿はよく書物の表紙に登場されませんが、幾世紀もの間に何百万、何千万、いや、何億の方がこの観音様にお参りになられ、生きる力をいただかれたかと思いをはせますと、やはり寂光院は「もみじでら」よりは「繼鹿尾の観音さま」の愛称の方がふさわしいと思います。

音を観（み）る！

観音は正しくは観世音です。文字通り「世の音を観る」ということです。音が、音は聞くものではないかとおっしゃるむきもありましょう。しかし、観音様のおはたらきである「慈悲」を考えるとわかるような気がします。

この言葉は奥の深い言葉ですが、とりあえずここでは「慈」とは共に喜ぶ、「悲」とは共に悲しむ、としておきましょう。実は「世の音」とは、人の喜び、悲しみ、苦しみ、悩みのこと、観るとは「理科の実験観察」と同様じっくりと見極めるという意味です。

《慈》共に喜ぶ

さて喜び事がある時、あなたならどうされますか。誰かに早く伝えたい、聞いてもらいたいと思いませんか。例えば子供が学校で百点とって帰ってくるとします。この喜びを早く伝えたいと答案用紙にぎれんばかりに振って駆けて帰ってくる。「お母さん聞いてよ聞いてよ、ほら、僕今日百点採ったんだよ」、その時お母さんが、「そりや、よかったね」と子供を抱きしめれば、その子は心から満足するでしょう。喜び事は一緒にあって喜んでくれる人がいれば喜びとは倍増します。

このように喜びごとなら、誰も黙ってはいません、声に出して伝えたくくなりますから、観音様ののんびり昼寝をしてみても聞き逃すことはないでしょう。

《悲》共に悲しむ

悲しみはどうでしょう。例えば、子供がけがをして泣いて帰ってくる。

そんな時お母さんが、素っ飛んで行って「痛かったね、痛かったね」となでてきすってやるだけで子供は泣きやみます。悲しみはお互いが悲しみあうことによつて悲しみは半減します。苦しい時、つらい時も、このやるせない気持ちをわかってくれる人がいるというだけで心は癒されます。しかし、本当に心底悲しい時、苦しい時、声を上げることも、涙も、うめき声でない放心状態のことがあります。誰もいないところに行ってしまう、この世から消え去りたいと思うことだつてあります。そんなときこそ観音様の出番です。音に頼らず、じっくりと声なき声を見極める観世音の不断の観察力が必要です。観音様はお仕事は慈悲ですが、慈よりも悲に本領を発揮されると言つていいでしょう。ですから観音様のお住まいをお寺では「観音堂」と言いますが、正式には「大悲殿」とか「大悲閣」とよんでいます。

観音様のお住まいは山の上

観音様のお住まいは古代インドの言葉で「ポーターラカ」それを音写つまり漢字に置き換えて「補陀洛山」といいます。観音様のお寺に山寺が多いのは、もともと観音様は高いところからじつと慈悲の心で我々を見守って下さっているからです。

寂光院の観音様もやはり山の上の「大悲閣」です。そこから「犬山」と言わず、ずつとはるか彼方のどこまでも、くまなく見守つておいでになるのです。